



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

9. 県北部地域における白ネギの初夏どりが可能な秋まき春定植作型の確立

[要約]

県北部の白ネギ栽培において、秋まきした大苗を春に定植する秋まき春定植作型は 6 月下旬から安定した収量及び品質が確保できる。また、品種及び播種時期を組み合わせることで 6 月下旬から 7 月中・下旬に連続出荷が可能となる。

[担当] 農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話 0867-66-2043

[分類] 技術

[背景・ねらい]

勝英地域では白ネギの初夏どり栽培として秋に播種及び定植し、翌年 7 月に収穫する圃場越冬作型が導入されているが、より早期収穫が可能で、在圃期間の短い栽培方法の開発が望まれている。そこで、低温伸長性が優れる品種を秋まきし、越冬育苗した大苗を翌春に定植する作型を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 「秋まき春定植作型」は秋に播種した苗を無加温のハウス内で越冬育苗して大苗化させ、3 月上旬の定植直後から 4 月下旬まで不織布で覆い初期生育を促進する作型で、従来の圃場越冬作型と比較して在圃期間の短縮、収穫開始時期の前進が可能である（図 1）。
2. 「ホワイトスター」は、播種時期が早いと抽苔の危険性が高まる。このため、10 月中旬に播種することで抽苔の危険性が低く 6 月下旬から安定した収量及び品質を確保できるが、これより遅い播種は 7 月以降の収穫となり、軟腐病の多発により減収する恐れがある（表 1、図 2）。
3. 「関羽一本太」は「ホワイトスター」よりやや収穫開始時期が遅いが、7 月収穫でも軟腐病の発生が少なく、7 月以降の収穫に適する（図 2）。
4. 以上のことから、「ホワイトスター」の 10 月中旬播種と「関羽一本太」の 10 月中旬～11 月上旬播種を組み合わせることで 6 月下旬から 7 月中・下旬にかけて白ネギの安定した連続出荷が可能となる。

[成果の活用面・留意点]

1. 育苗は 1 重ビニール被覆の無加温ハウス内で行い、ハウス内気温が 20℃以上の時には換気する。また、培土の水分状態に応じて 1～2 週間おきに 1～2 L かん水する。追肥は葉色がやや退色したら液肥（N：P₂O₅：K₂O＝10：4：8）を 500 倍に希釈して苗箱当たり 1 L を施用する。
2. 育苗条件が異なると生育や抽苔の危険性が高まる可能性がある。
3. この技術は勝英地域における現地試験の結果であり、気象条件が異なる地域では播種時期や品種選定を別途検討する必要がある。
4. 7 月以降の高温期には軟腐病の発生が大きな減収要因となるため、防除等を適期に行う。



[具体的データ]



図 1 大苗春定植作型の栽培概要

表 1 品種及び播種時期が抽台率^z（％）に及ぼす影響

年次	品種	10月			11月
		上	中	下	上
H26	ホワイトスター	-	1	0	0
	関羽一本太	-	0	0	0
H27	ホワイトスター	1	0	0	0
	関羽一本太	0	0	0	0

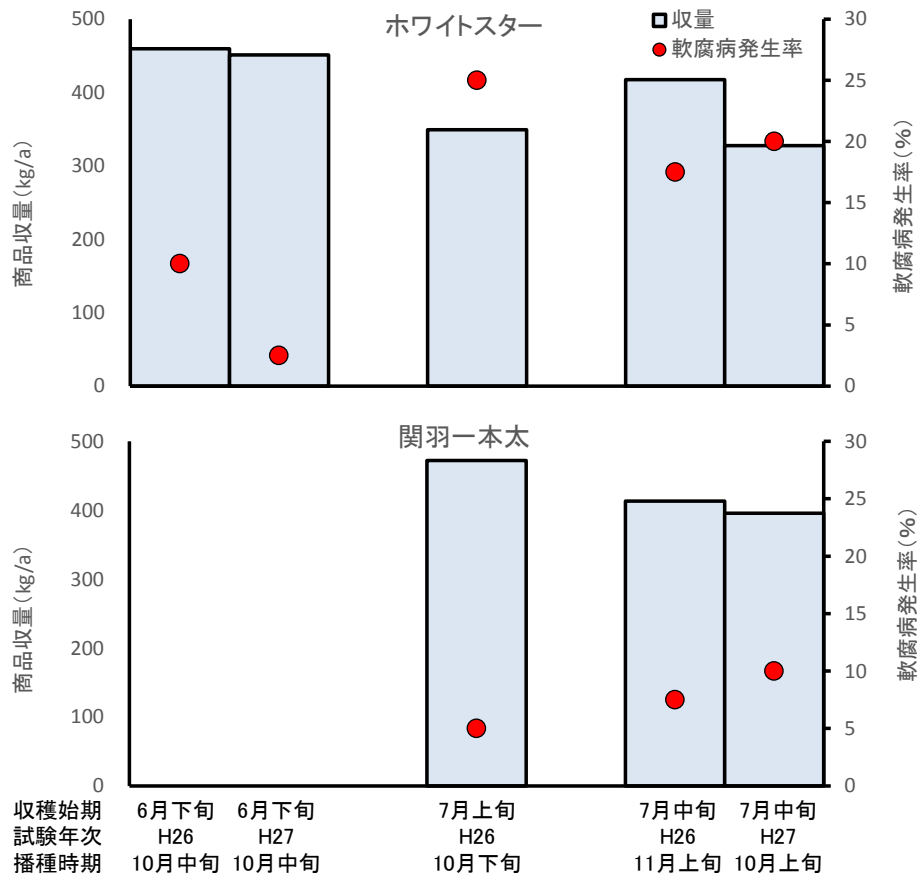
^z 抽苔株/試験区内の株数×100で算出

図 2 品種、播種時期が収穫開始時期、商品収量と発病率に及ぼす影響

[その他]

研究課題名：高冷地域に適した果樹・野菜・花品種の育成選定と栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2015年度

研究担当者：川村宜久、信岡佑太

関連情報等：[平成26年度試験研究主要成果、63-64](#)